

KANGCHENJUNGA YALUNG KANG



1981年

日本カンチェンジュンガ学術遠征報告

日本ヒマラヤ協会

THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

ヤルンカン頂上に立つ八木原圀明登攀リーダーと
測量用ポール（背景はカンチエングンガ主峰）

ご あ い さ つ

日本ヒマラヤ協会は、発足以来15年になりましたが、現在では会員数も1000名をこえ、全国にまたがる大きな組織として成長しておりますことは日頃みなさまからいただきま

すご鞭達のためものと改めて感謝申し上げます。
本協会は、その名称が示しますように、ヒマラヤ諸国と日本との交流、および親善を目的として登山、踏査、各種のフィールド・ワークを通して活動を続け今日に至っていますが、このカンチェンジュンガ学術遠征もそのような活動の一つとして実施されたものであります。

登山は、目的とした縦走こそ果すことができませんでしたが、世界第三位の高峰カンチェンジュンガ(8,598m)に6名、ヤルンカン(8,505m)に5名が登頂することができました。又、中国隊のエベレストに次いで世界でも画期的な試みであった両峰の頂上に測量用ポールを設置することに成功し、ベースキャンプ下に待機していた学術班によって確認されました。

今回の登山を通じまして得た貴重な体験をもとに益々ヒマラヤ並びに高所登山の分野で課せられた使命を果すべく精進を重ねる所存でありますので今後共、本会に対するご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

末尾ながら遠征隊派遣にあたってひとかたならぬお世話をいただきました各位に改めてお礼申し上げ、ご挨拶といたします。

日本ヒマラヤ協会
会 長 柴田金之助

1981年日本カンチェンジュンガ学術遠征に際しましては、各位から多大なご支援をいただきましてありがとうございます。

この報告書でもふれておりますように、この度の遠征の目標は、カンチェンジュンガ山群を舞台とした8,500mラインの縦走でありました。

縦走登山は古くから試みられてきたものの、その成功は、日本隊による二つの例があるに過ぎません。この遠征は、さらに高度を増したラインで行うことが目的でありました。

計画は、ネパール政府の登山政策、国内の経済情勢、メンバーの結集等で何度も練り直されましたが最終的には、ヤルンカンとカンチェンジュンガ主峰の縦走を行うことが決定したのは出発の3ヶ月前でありました。

順調に行われた登山ではありましたが、上部に進むに従って深い雪に悩まされ、又、少ない酸素ボンベを有効に使用するために、極力この使用を避けたために隊員にもかなりの負担をかける結果となりました。

最終キャンプからのアタックは、好天に恵まれ予定の時間に頂上へ達するものと確信しておりましたが、意外に深い雪に悩まされ遅々としてはかどらず予定時間の倍を費して頂上に達したのであります。この結果両峰共に二名づつが頂上に達する前に所持する酸素ボンベが空になりながらも縦走に必要な酸素ボンベを頂上まで荷上げたのであります。

頂上まで縦走態勢を保持したものの、残念ながら縦走は断念せざるを得ませんでした。

遠征に関する経過、登山報告などは本文中に述べてあります。誇れるものは何もありませんが他山の石としていただければ望外の喜びであります。

最後に本遠征隊にお世話いただきました内外の各位に改めて感謝申し上げます。

日本カンチェンジュンガ学術遠征隊
隊 長 山 森 欣 一

縦走の発想とメンバー結集

1 縦走の発想

「エクスペディション」の研究を掲げて1971年HAJ内にグループを結成したメンバー達は、本物の研究は実践をともないながら、具体的な課題を追求して行くことによって完成するという考えで行動を起しました。ヒマラヤを目標としたメンバーの目標は「絶対的な高度」と「人文的な位置」でした。又「エクスペディション」の対象が「登山」だけではなく多様な分野にわたることを考える時、これは自然の流れといえました。

発想の段階においては、必ずしも創造的ではありませんでしたが、1974年のラムジュン・ヒマール(6,983m)1975年ヌン(7,135m)リシ・パハール(6,992m)の三隊の遠征を構築し、実践しました。過去を総括して課題を見出し、それを修正する方向での理論を導き出すことは、このグループにとっての「解決策」ではありません。

課題解決の方法論は「実践」によって実証されるか、或いは「実践」を企画し準備するというアクションの中で実証されねば真の意味をもって来ないと考えていたのです。

三つの遠征を進める中で、グループとしては今後、多様なエクスペディションをフィールドに展開し得るためには、一度は絶対的な高度と総力戦を経験することが必要であると考えました。したがってそのエクスペディションそのものは、(今回の縦走登山)このグループにとって最終目標の到達点ではなく、むしろ踏み越えなければならない一過程であるとされたのです。こうして、当時

未踏の最高峰であったカンチェンジュンガ南峰から主峰への縦走計画が生まれたのでした。

2 メンバー結集

計画の骨子は、未踏の東南稜をインド側から登り主峰に至るものでした。この東南稜の上部には「ゼム・ギャップ」と呼ばれるコルがあり①無名峰(7,780m)②南峰(8,491m)③中央峰(8,496m)を越えて主峰に至るまでは実にその距離15kmに及び少なくともその内の4kmは8,000mを超え、南峰から主峰の2kmは8,500mラインを超えると、いう想像を絶する困難を予想させました。

このようにカンチェンジュンガ縦走の巨大さは払拭できない現実としてあり、それが又、メンバーを魅了して止まなかったのではありますが、残念ながら我々の人的な資源では、このプロジェクトを推進するには力不足でありました。そこで、「一つの完結した登山の中で高々度体験させ、本プロジェクトの推進中核メンバーを育成する」ために1978年カラコルム・パツラII峰(7,730m)〔当時カラコルム未踏の最高峰〕に10名を送り、その南面から初登頂に成功しました。

しかしながら我々の予測は外れパツラ登山に参加したメンバーのほとんどがこの登山のみで燃えつきてしまいました。それ以後は我々のグループが独自にメンバーを育成する期間も残されていませんでしたので①HAJヒマラヤ登山学校の参加者②身近かにいてヒマラヤで活躍している者等の中から数人の参加を得て、計画の中核が固ったのは、1979年春のことでした。

計画のあらまし

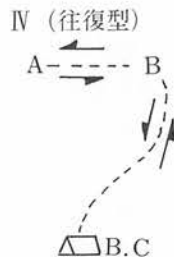
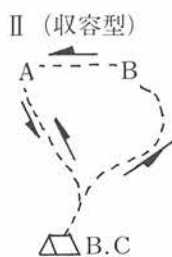
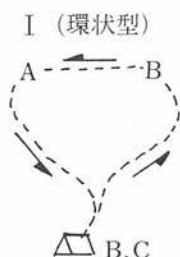
1 申請の経緯

当初、縦走計画はインド側から検討されました。このため、事情によってはインド側とのジョイント登山を考える必要がありました。ダーズリンにあるHMIはカンチェンジュンガ計画遂行上の有力な手がかりであり、何人かのメンバーが数回に亘り同校を訪問し校長や主要メンバーと懇談しました。こうして1977年3月にはIMF（インド登山財団）あてに登山許可申請を提出しました

が却下されました。その後もインド岳界の要人を通じて許可の打診を続けました。

このような情勢の下で1977年8月ネパール政府から突如としてカンチェンジュンガを登山許可対象の山としてオープンすることを発表されました。直ちに情勢の変化への対応策が協議され、慎重な検討の末にネパール側から登山許可申請を提出することに決定しました。インド側からの申請は取り止めとなりました。

2 縦走方法とライン



いよいよ南峰から主峰への具体的な作戦を練る時期になりました。方法論は大別して二つありました。上図IVのように一つの登路を作って往復する。同じくIIのように二つの登路を作って一方を登路として残る一方に収容隊を派遣して縦走者を収容する。

IVの方法が困難です。しかし、IIの方法は、一隊で二つの8,500m峰登山をすることになりますの

で必要人員が増え、それだけ危険に曝らされる確率が増えます。計画が具体化すると、より現実的な方向でなければ理論的に不可能になって来ます。我々はIIの方法を採用することにしました。つまり縦走隊は南峰を出発して主峰を越える。一方の収容隊は主峰直下で待機する。ネパール側のカンチェンジュンガ西面は、このような方法を採用するのに都合の良い地形でした。

戦略と縦走ラインの変更

1 戦略

さて計画の骨子は、南峰から主峰までの8,500mライン（直線距離約2.5km）を収容型の登山を用いて縦走することに決まりましたが、具体的にいかなる登山を展開するのかを検討した結果次の問題点が浮び上がってきました。

- (1) 南峰の登路が未知で登攀は8,000mを越えた所でより困難が予想される。
 - (2) 縦走ラインはもとより8,000m台の荷上についても無酸素（酸素ボンベを携行しないという意味で使います）では不可能である。
 - (3) 縦走ラインを一日で終了するのは不可能
 - (4) 1978年春、目ざす南峰、中央峰が未解禁峰となった。
- これらについては以下のような戦略をもって臨みました。
- (1) 強力な偵察隊を派遣して問題点となる8,200m付近まで試登する。
 - (2) 約200本近い酸素ボンベを使用する。
 - (3) 純粋ではないが中央峰と主峰のコルにサポート隊を配置し宿泊キャンプを作る。
 - (4) 強力な渉外活動を展開し1981年までにオープンさせる。尚、万が一という場合であっても8,500mラインを縦走するという願望に変わりはないので解禁峰であるヤルンカン(8,505m)の許可を取得する。

こうした戦略に基づいて1978年11月に渉外要員をカトマンズに張り付け両ピークのオープンについて強い働きかけを始めると共に1979年1月にはヤルンカンの許可を取得（主峰は既に取得

済み）又、計画を練り直し、収容隊ルートを中央峰と主峰のコルに修正し実現可能性の高いプランとしました。1980年春には七名の強力な偵察隊を派遣し、実践面で多くの収穫を得ることができ、ますます8,500m三山縦走に自信を持ったのでした。

2 縦走ラインの変更

ところが、ネパール登山規則による登山申請のタイムリミットが迫った1980年秋になっても現実に南峰、中央峰はオープンされませんでした。一方、計画を具体化する中で物資調達コストも徐々に上昇し予算も膨れ上がってきました。しかし、逆に厳しい経済情勢の中で外部から調達する計画の資金は不可能な状態になってきたのです。

偵察隊が帰国してから準備活動は全て三山を縦走する計画で進んでおりましたが、このような情勢の下で改めて計画全体の見直しをした結果、より少ない予算と酸素ボンベ（酸素ボンベの予算に占める比重は高い）で縦走可能なラインとして、ヤルン・カン（カンチェンジュンガ西峰8,505m）と主峰が現実的な対象として浮び上がってきました。カンチェンジュンガ三山を8,500mの高みで縦走するという困難な目的達成のために5年間の準備活動を進めてきた中核のメンバーにとって、それは耐えようのない失望でした。しかし、計画を実施する目前であるこの時期に政治（未解禁）と経済（外部資金調達不可能）の二つの厚い壁に立ちふさがれている以上二者択一の道しか残されておりました。それは、「縦走の放棄」か「ヤルン・カン～主峰の縦走」でした。

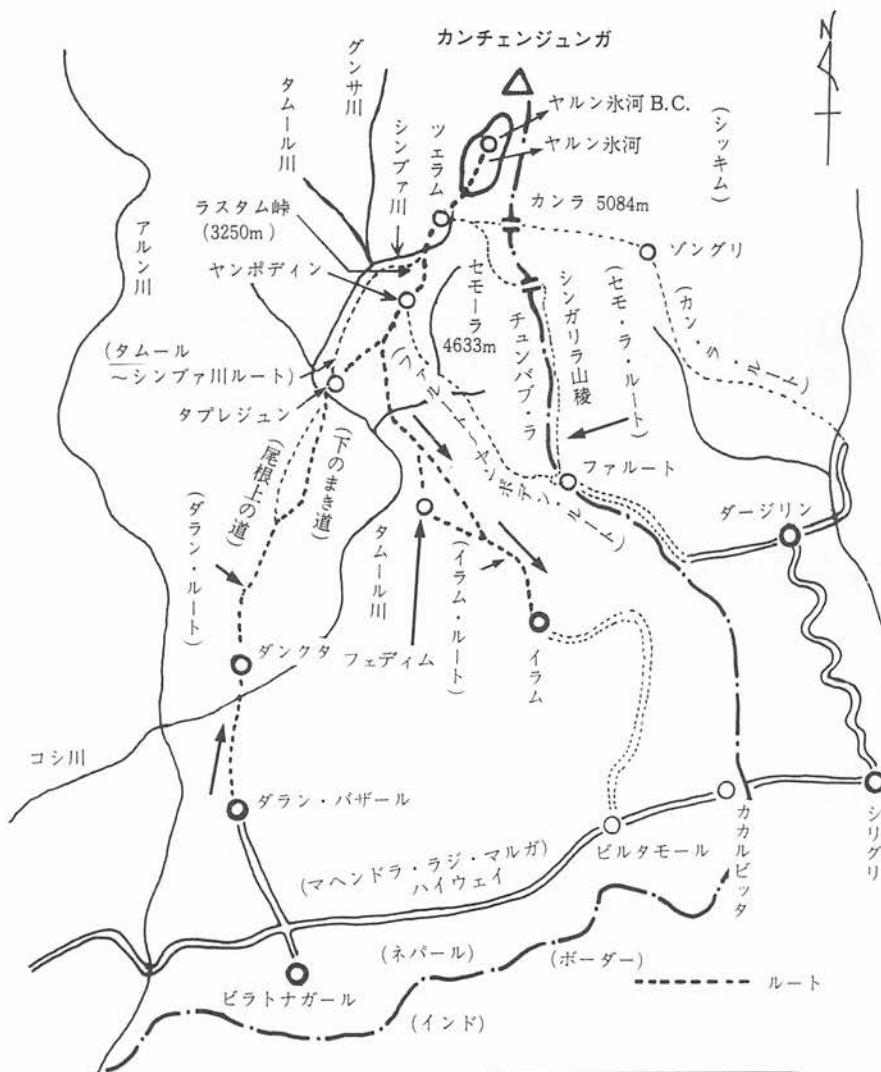
こうして、ラインを変更して縦走登山を実施することが決まったのは1980年10月下旬でした。

隊 の 構 成

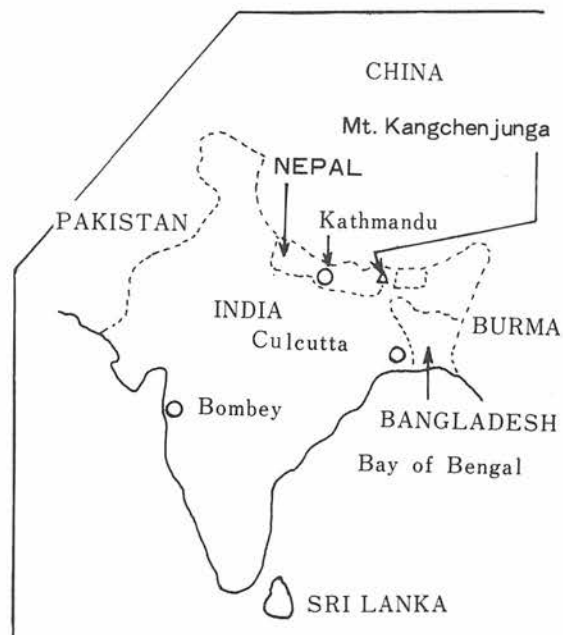
隊 長	山 森 欣 一 (37) 山嶺登高会 Kinichi Yamamori	通 信	加 藤 康 二 (32) イエティ同人 Yasuji Kato
副 隊 長	菊 地 薫 (35) 福島県こまく Kaoru Kikuchi さ山岳会	医 療	加 藤 亮 子 (46) Ryoko Kato
登 攀 リーダー	八木原 隄 明 (34) 群馬ミヤマ山 Kuniaki Yagihara 岳会	連絡将校	ラビ・シュレスタ (28) Police Liaison Officer Rabi Shrestha Inspector
登 攀 リーダー	保 坂 昭 憲 (33) 福島県こまく Akinori Hosaka さ山岳会	Sirdar	ペンバ・ノルブ (31) Namche Pemba Norbu
登 攀 リーダー	尾 形 好 雄 (32) 雪と岩の会 Yoshio Ogata		ペンバ・ツェリン (34) Thamo Pemba Tshiring
食 糧	飛 田 和 夫 (35) 立峰山岳会 Kazuo Tobita	Cook	ジャビアン・テンジン (45) Namche Japyang Tenjing
装 備	山 田 昇 (31) 沼田山岳会 Noboru Yamada		アン・ノルブ (25) Lukla Ang Norbu
装 備	藤 倉 和 美 (31) 雪と岩の会 Kazumi Fujikura	High — altitude porter	
食 糧	若 尾 巻 広 (31) 諏訪山岳会 Makihiro Wakao	ダワ・ノルブ Dawa Norubu (27) Ilajung	
輪 送	渡 辺 優 (31) 横浜蝸牛山岳 Yu Watanabe 会	ペ マ Pena (35) Thaktor	
記 録	八 嶋 寛 (31) 仙台山岳会 Hiroshi Yashima	パサン・テンバ Passang Temba (35) Chhoplung	
梱 包	佐久間 隆 (30) 東京白稜会 Takashi Sakuma	ジャンブー Jangbu (31) Chherma	
食 糧	小 松 伸 (30) 酒田労山 Shin Komatsu	アン・ギャルツェン Ang Gyalzen (53) Chhoplung	
酸 素	角 田 不 二 (28) 明大駿台山岳 Fuji Tsunoda 部	ペンバ・ドルジェ Pemba Dorjee (32) "	
食 糧	福 山 茂 (30) 日本岳友会 Shigeru Fukuyama	アン・ドルジェ Ang Dorjee (30) Chat	
輪 送	片 岡 邦 夫 (27) 法大II部山岳 Kunio Kataoka 部	ウルギン・ドルジ Urgen Dorzi (40) "	
食 糧	谷 岡 俊 匡 (27) Toshimasa Tanioka	ニマ・ドルジェ Nima Dorjee (29) Kerong	
装 備	二 階 義 治 (27) 大阪凍稜会 Yoshiharu Nikai	ピア・バハドール Bir Bahadur (22) "	
輪 送	鈴 木 茂 (26) 太田山岳会 Shigeru Suzuki	ナワン・ヨンデン Nawang Yondhen (29) Rolwaling	
梱 包	鈴 木 治三郎 (25) 横浜蝸牛山岳 Jisaburo Suzuki 会	ニマ・テンバ Nima Temba (25) Gumela	
		アン・パサン Ang Passang (39) Thomde	
		ソ ナ Sona (44) Namche	
		Kitchen boy	
		ビドメンドラ・ラマ Bidmendra Lama (22) Solu	
		アルジュン・ラム Arjun Lama (17) "	
		Mail runner	
		アン・ダワ Ang Dawa (51) Lukla	
		パダム・バードル Padham Bahadur (26) Solu	

行 動 概 要

12月10日	第一次先発(菊地)成田発				到達できず、ルート上に荷物をデポ
13日	隊荷船積(17.6t)パンリ号	5月	6日	アタック隊ABCで降雪のため停滞	
20日	第二次先発(山田)成田発			上部偵察の結果、デポ品はアイスビ	
1月7日	酸素ボンベ、カトマンズ着			ルディングの崩壊によると思われる	
13日	隊荷カルカッタ陸揚げ			雪崩のため全て流失したことが判明	
14日	第三次先発(片岡)成田発	8日	双方ともファイナル・キャンプ		
2月1日	先発本隊(4名)成田発		(C ₅)建設		
5日	隊荷ピラトナガールに集結	9日	主峰、ヤルン・カン側とも、それぞ		
11日	第一次本隊(5名)成田発		れの頂上まで縦走態勢を作り上げた		
14日	本隊(8名)成田発		ものの時間切れで縦走は中止となっ		
16日	先発隊(7名)イラムよりキャラ		た。双方の頂上に測量用ポールを建てる。		
	バン開始(ポーター204名)	4:00	主峰側C ₅ を出発		
18日	後発隊(加藤亮)成田発	5:15	ヤルン・カン側C ₅ を出発		
26日	本隊(15名)ダーラン・バザー	11:51	主峰頂上に山田、藤倉、鈴木(茂)、		
	ルよりキャラバン開始		保坂、片岡、ニマ・テンバの計6名		
28日	先発隊ラムゼー(4,350m)着		が順次登頂		
3月15日	本隊ラムゼー着	12:30	ヤルン・カン頂上に尾形、八嶋、角		
16日	先発隊ベース・キャンプ(5,500m)着		田、八木原、飛田の計5名が順次登		
22日	C ₁ (6,150m)建設		頂		
29日	C ₂ (6,450m)建設	13:30	縦走中止決定・下山開始		
31日	本隊ベース・キャンプ着	17:10	主峰側C ₄ へ到着		
	先発隊ABC(C ₃ 7,300m)着		ヤルン・カン側C ₅ へ到着		
4月3日~8日	先発隊ラムゼーにて休養	19:00	主峰側全員ABC到着		
14日	ABC建設	20:23	八木原、八嶋、飛田、C ₄ 到着		
20日	ヤルン・カン側C ₄ (7,850m)建設	22:35	八木原、尾形、八嶋、飛田、グレー		
21日	" C ₅ 予定地(8,250m)		トシェルフの平坦部へ到着		
	までフィックス完了	00:11	八木原、尾形、飛田ABC到着		
23日	主峰側C ₄ (7,850m)建設	11日	全員BCに集結		
24日	" C ₅ 予定地(8,300m)まで到達	14日	八木原、飛田の凍傷が悪化のためヘ		
26日	" " までフィックス完了		リコプターの出動を要請		
29日	主峰側、ヤルン・カン側共にC ₅	15日	ベース・キャンプ撤収・下山		
	への荷上げ完了	18日	ヘリコプター出動には日数がかかる		
27日~5月1日	6名ラムゼーにて休養		ことが判明し、人力で降ろすことに		
29日~5月1日	8名BC下(5,000m)にて休養		決定		
5月3日	アタック隊BC出発	19日	最奥の部落ヤンボディン着		
	ABC上部にて小雪崩発生し、シ	26日	イラム着		
	ェルバ1名負傷する	28日	カトマンズ着		
4日	双方のC ₄ へ最後の荷上げ行うも	6月2日	八木原、飛田、山田、鈴木焔国		



キャラバンルート図



縦走を目ざして

1 先発隊の行動

1980年春（プレ・モンスーン期）に派遣した偵察隊の情報によって、カンチェンジュンガ西面に発達したヤルン氷河の通過いかんによっては登山が大きく左右されることが判明したため、登山隊は先発隊と本隊に分かれて活動することになった。

先発隊の役割は、雪のラストム峠をスムーズに通過して、カトマンズから同行するポーターを軸とした特選ポーターによるヤルン氷河上の隊荷輸送の円滑化と氷河上のルート確保、並びに隊員、シェルパによるABC（グレートシェルフ上の基地7,300m）へのルート工作の終了、そして、カルカッタからピラトナガルへの隊荷輸送等々、この登山の成否を握る仕事の処理であった。このため勢い仕事のコなせるメンバーが配置された。菊地薫副隊長以下、山田昇、藤倉和美、若尾巻広渡、片岡邦夫、鈴木茂の7名の隊員である。

1980年12月11日第一次先発としてネパール入りした菊地を皮切りとして1981年2月2日には、残り4名がネパール入った。2月5日には、インドとの国境の街であるピラトナガルで無事隊荷の通関を終了した。東京から船便で送った17.6tの隊荷は一個も紛失することなく受取ることができた。かつては、船便で送った隊荷の輸送のために隊員が酷暑のカルカッタで悪戦苦闘した物語が残っているが、今回はカルカッタ～ピラトナガルの輸送、通関を全てネパールの会社へ一任し、隊員はタツチしなかった。

2月16日先発隊は204名のポーターと共にイラムを出発した。この街道は日程的には短縮できるのであるが、ポーター集めには苦勞させられる。何度かのストライキを味わいながらも9日後の2月24日には、最奥の部落ヤンボディンに到着した。心配していたラストム峠北面の雪は少なく、通常のポーターが入る最後のカルカ、ラムゼーには順調な日程で2月28日到達した。

昨年の偵察時は4月1日であったが、今年はそれより1ヶ月早い時期であるのに雪は少なく、ヤルン氷河も嘘のように積雪は少なかった。こうして予定通り、ヤルン氷河上の4,750m（グレッシャーキャンプ・GL.C）と5,150m（ターニングポイントキャンプ・TP.C）に二つのキャンプを設けた後ベースキャンプ（パツへの墓のある丘約5,500m）を建設したのは3月16日であった。

BCからABC予定地のグレートシェルフまでは標高差1,800m、二段に分かれた氷河が続いているが下部は悪すぎてルートにならないため、ハンブ稜の側壁を登り一担氷河に降り上部氷河に取り付いてグレートシェルフに達する。ハンブ稜側壁にC₁（6,150m）を建設したのは3月22日、上部氷河の中間にC₂（6,450m）を建設したのは3月29日、そして、3月31日には5名がABC予定地に達してその目的を完全に遂行したのであった。

2 本隊の行動

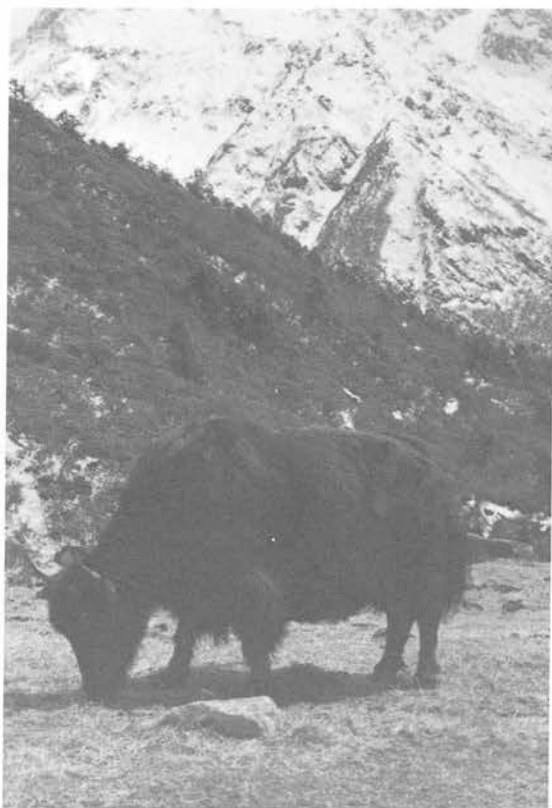
ビトナガルに集結された隊荷は、先発隊が出発した後も、450個(30kg梱包)が残されていた。先発隊からの情報により、イラムからキャラバンをスタートさせることは得策でないことが判明したので日数的には5日間長くなるが、ポーター事情の良いダーランバザールからキャラバンを始めたのは2月26日であった。450人のポーターともなると雇用手続と荷渡して5時間以上もかかってしまう。これは、時折行う賃金の支払の時も同じであった。

幾度かあったお決まりのポーター騒動も何とか処理して、停滞なしのノンストップで最奥の部落ヤンボディンに着いたのは、3月11日。ここでも果して450人のポーターが集まるかどうか(ヤンボディン 標高1,650m、ラムゼー標高4,300m)という我々の懸念が嘘のように逆に50名以上のポーターが余りナイケが困まるというハプニングつきですんなりと出発し、ラスト峠の北斜面の雪に少々足をとられながらも予定通り隊荷の集結地ラムゼー(4,350m)に着いたのは3月15日であった。

ラムゼーからベースキャンプに至る間に横たわる「ヤルン氷河」の隊荷の輸送には、カトマンズポーター66名、グンサポーター30名計96名が、先発隊によって手配されていた。この96名のポーターによって3日行程を400個の荷物を上げなければならない。隊員の高度順応期間に合わせて、隊荷がB・Cへ集結するようにローテーションを組みながら徐々にキャンプ移動を行って行く。

氷河内は昨年に比較して少ない積雪であったが、輸送に従事する期間が長くなるに従って、ポーターの不満もつものってくる。もともとが、キャラバン中から喉を痛める者が多くセキの合唱の様な状態の上、標高も5,000m近くなってくるので、回復するのは非常にむづかしかった。これは、隊員、シェルパ、ポーターに共通した現象でもあった。

キャンプが進むにつれてポーターを解雇して行く。1,000RS以上の賃金をもらって雪の中を降り



▲ ツエラムで草をはむヤク

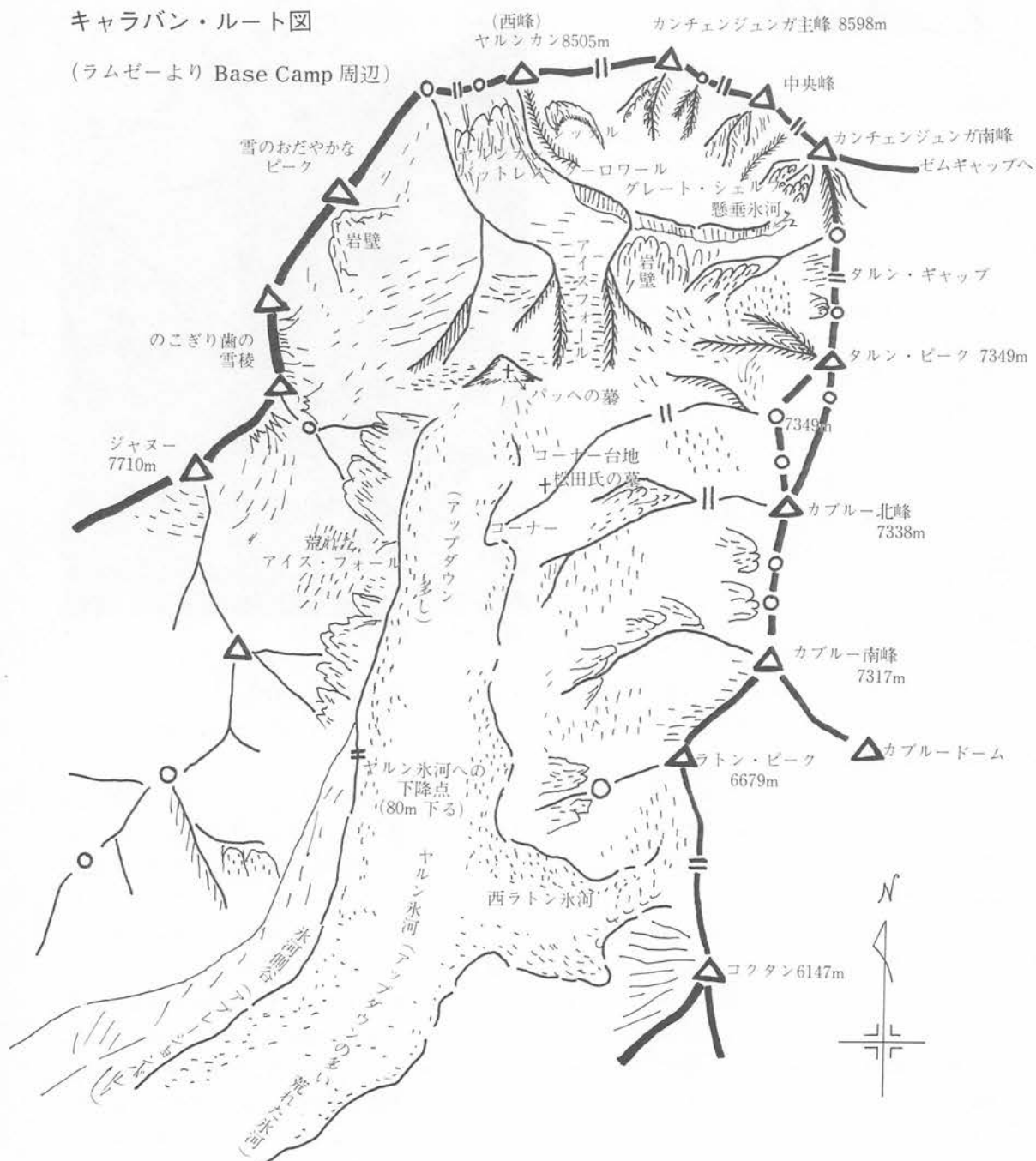
て行くポーターを見ていると、束の間の触れ合いだったにすぎないものの、やはり別れの淋しさが漂う。

こうして、本隊がベースキャンプ入りを果し、先発隊と合流したのは3月31日であった。本隊がキャラバンを開始してから34日目のことであった。純粋なキャラバンが18日(ダーラン・バザール～ラムゼー)高所順応と隊荷集結期間16日(ラムゼー～B・C)である。ヤルン氷河入りした過去の隊からみてまずは順調に到着したと思う。— いは、昨年の偵察の成果でもあっただろう。

隊の編成は、隊員22名(登攀要員18名本部要員4名〔隊長、副隊長、通信、医療〕)連絡将校1名、シェルパ22名(サダー2名、HAP14名、BC要員6名)キッチン用ポーター2名計47名がB・Cに入り、ダウラ用ポーターとしてTP・Cに13名ラムゼーに13名の計26名を配置し、このメンバーで登山終了まで活動することになった。

キャラバン・ルート図

(ラムゼーより Base Camp 周辺)



3 登攀活動

シェルパによる「安全登山祈願祭」を行った後、本格的な登山に入ったのは4月3日であった。この日から先発隊7名は、ラムゼーで一週間の休養に入った。本隊はABCへのルート確保のために高所経験豊かな尾形、八嶋、角田の3名を先行させ、残りは定められたローティションに従って第一期(ABCまでの順応と荷上げ)の活動に入った。尾形パーティーは一週間でABCに到達したが、ABC入りを見合わせ一度BCで休養に入った。この間、ラムゼーで休養していた先発隊もBCへ戻り、本隊とのチーム再編成を行った。この結果ABC先のルート工作のため、山田、藤倉、片岡の3名を先行させることになり4月11日BCを出発して行った。

4月18日には、第一期が終了しABCまでの順応を終了したが、この間ローティション通り動けなかったのは、八木原、福山、谷岡、二階、鈴木(治)5名であった。八木原は、ラムゼーで重度の障害に陥り込んだ鈴木(治)の付き添いとしてトロンタン(2900m)まで降りていたため日程が遅れ皆が二週間かけたBC入りを五日間で行ったことが影響していたのだろうと思う。福山は目に異常が出た。谷岡はBC入りまでに順応し切れず一担GLCまで降りた。二階はBC入り後不調となった。

山田、藤倉、片岡チームと尾形、八嶋、角田チームによるカンチェンジュンガ主峰、ヤルン・カンへのファイナルキャンプまでのルート工作は、4月24日に終了した。共に8000mを超えた高所で日本の冬山のような時には腰まで没するラッセルに悩まされた。主峰側は、トップを勤めた片岡が酸素を用いたものの、山田、藤倉は無酸素で8300mまでの荷上げを行った。ヤルン・カン側はルートを急峻なクローワール(頂上からシクルまで一気に高差700m切れ落ちている)内にとっているため胸まで没する雪との戦いであった。

この間4月21日から登山は第二期に入り、残るメンバーがABCに陣取り各ファイナルキャン

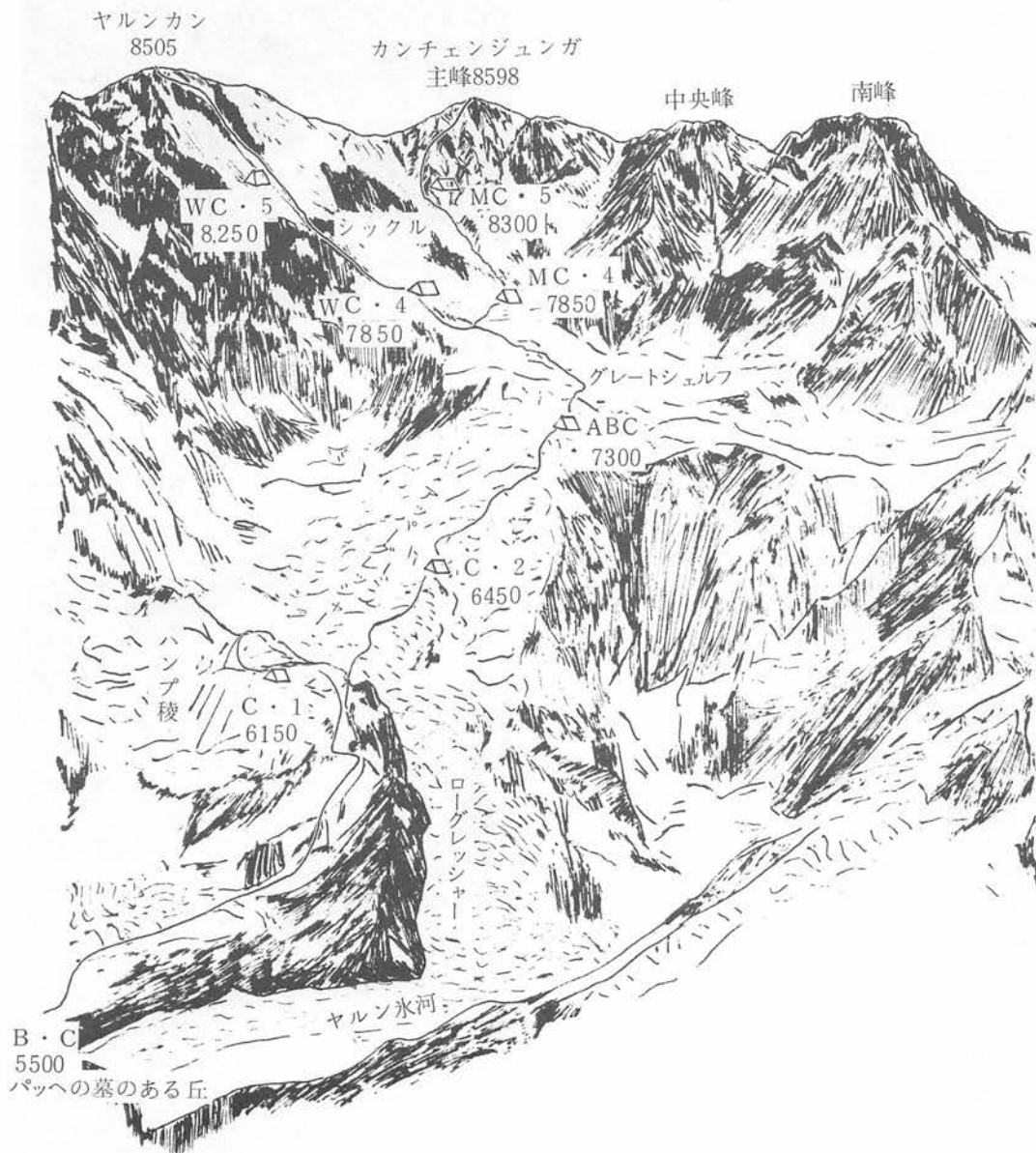
プ(C₅)への荷上げに当たった。当初、C₅への荷上げは各人2回を予定していたが、現場での作戦会議で1回に変更した。この時シェルパによる、C₅への荷上げも組み込まれた。不調でローティションに間に合わなかった谷岡、二階、鈴木(治)とABC上で目の異常が再発した福山の4名は、残念ながら上部での活動は望めなくなっていた。

4月26日には、主峰側C₅へのルート整備を保坂、渡辺、鈴木(茂)チームで終了した。渡辺は無酸素で荷上を行った。ヤルン・カン側C₅へは、飛田、佐久間、小松チームが3名共無酸素で荷上に向かったが、多量の積雪でフィックス掘り起し作業に手間とり8000m上で荷物をデポして下山せざるを得なかった。この荷物は翌27日八木原、若尾チームによってC₅へ荷上された。そして最後に29日シェルパ6名によってそれぞれのC₅へ酸素ボンベが荷上げされて、少なくともトラバース4名、サポーター6名による交差縦走態勢が確立されたのであった。

5月3日、最後のC₄荷上げに向かった福山チームは、キャンプ上で発生した小雪崩によってトップにいたシェルパー一名が負傷し荷上げは翌日に延ばされた。しかし残念ながら翌日C₄へ向かったもののたどり着くことができずに途中でデポする結果となった。

登山第三期は、アタックである。ファイナルキャンプへの荷上げを終えた隊員はそれぞれラムゼーやTP・Cへ降りて休養していたが、5月1日BCに集結した。ここでアタッカー10名(トラバース4名と頂上までのサポーター6名)とC₄へのサポーター4名に編成替えされた。主峰側トラバースは山田、藤倉、サポーターは保坂、片岡、鈴木(茂)、ヤルン・カン側トラバースは今回のトラバースリーダーである尾形と八嶋、サポーターは八木原、飛田、角田である。渡辺と小松は主峰側C₄サポート、若尾と佐久間はヤルン・カン側C₄サポートと決定した。

5月6日、ABCは深い新雪に覆われ、アタッカー達は本日のC₄への移動をためらった。BCの隊長、C₂の副隊長は本日の移動を希望し特に



—カンチェンジュンガ・ルート概念図—

隊長からはトランシーバーを通して「本日の移動が不可能であれば縦走の可能性は少なくなる」との強烈な檄がとばされたが アタッカーは積極的にならなかった。こうして隊長から本日ABC停滞の決定がおりた。晴れ間を縫って上部を偵察したメンバーによりシクル（鎌）内の通称「おにぎり状」と呼んでいたアイスビルディングの崩壊によって、シクル下部全域にデブリが確認され、先日のデポ品は流失した模様とのことであった。

5月7日、縦走を目ざすからにはどんな悪天であつても本日は動かなければならなかった。幸運にも好天であつた。シェルパのサポートを受けてこの日双方共C₄へ移動し各キャンプサイトを増設した。既設のテントは崩壊寸前であり留守にしていた間の積雪のものすごさを想像させた。ヤルン・カン側は最悪であつた。荷上途中にデポした物資の中に酸素ボンベ2本が含まれていた。そしてC₄にデポしたボンベの内1本についても空になっているとのことであった。5人の今晚の睡眠用として2本、明日の行動用として5本計7本が必要であつたが4本のみが手元に残っていた。

5月8日、本日も好天であつた。熟睡した主峰側は13時過ぎにはC₅へ到着4～5人用テント二張の雪を切り出し設営した。相撲をとったり、歌声もトランシーバーを通じてBCに届いた。ヤルン・カン側は遅かった。14時過ぎに尾形が到着したものの後続がなくテントサイトも氷が出たりして整地に苦労した。行動用酸素の不足（5人で3本）が大きく影響している。テント二張を設営して落ちついたのは19時を廻っていた。

5月9日 アタック日、BCで3時起床すると満天の星空、カプルーからヤルン・カンにかけて細く長い天の川が出ていた。上部では昨日の行動が尾をひいていた。主峰側は4時には出発した。ヤルン・カン側は遅れて5時半出発。いづれにしてもこの天候では、縦走は完成できるだろうと思われた。しかし、意外であつた。行動は遅々としてはかどらず、時間はどんどん過ぎて行つた。主峰側は盛んにルートについて指示を仰いでくる。しかし、ヤルン・カン側は連絡がない。



▲主峰頂上左7mに立つ測量ポール

▼WC₄直下を登る





▲主峰頂上に立つ隊員
左から山田、保坂、ニマ・テンバ、鈴木茂

▼デブリを越えてヤルンカンC₄へ向う



11時51分、主峰隊は、山田、藤倉が同時に頂上に立った。次いで鈴木(茂)、保坂、片岡、ニマ・テンバと頂上に立った。この時点で主峰側からの縦走は断念した。12時30分ヤルン・カン隊は八嶋、角田、尾形が頂上に立った。遅れて八木原、飛田も立つ。縦走隊長である尾形、ABCにいる菊地副隊長に縦走についての意見を求める。又、サポート隊リーダーである八木原にサポート隊の下山について確認する。縦走中止を決定する。時に13時30分。それぞれの頂上には、トラバサー用としての酸素が各2本づつあった。酸素が切れながらも背中にある酸素には手をつけずに頂上までサポートした隊員達の泣声がトランシーバーを震わせる。状況を冷静に話したABCの菊地副隊長の言葉も、ヤルン・カン頂上から縦走隊長として隊員に謝罪する尾形の声も既に無念さが滲み必死にそれに耐えているように思えた。

頂上では、今回のもう一つの課題であったそれぞれの頂上への測量用ボールの設置が行なわれた。特に主峰は、コーナー台地上に陣取る学術班と頂上をBCが中継して下から確認できる位置に設置した。(頂上の左7m・ボール頭と頂上が同じ高さ)ヤルン・カンは真の頂上であったが、これも

この日のうちに学術班によって下から確認された。

主峰側はC₅ テントを回収して順調に下山し、ABCに19時には全員が帰還した。ヤルン・カン側は苦しかった。C₅ テントを回収してC₄ へ下降したのが20時23分。シクルを横断してABCに帰還した時は既に翌10日0時11分であった。

こうして長かった5年間の戦いは終わった。下山して登頂を祝福する言葉を手向けてくれる人々に感謝しながらもその都度胸を刺されるような思いから脱し切れないでいる。各頂上から縦走路を間の当りに見た10名は更にその思いに悩まされているのではなかろうか。

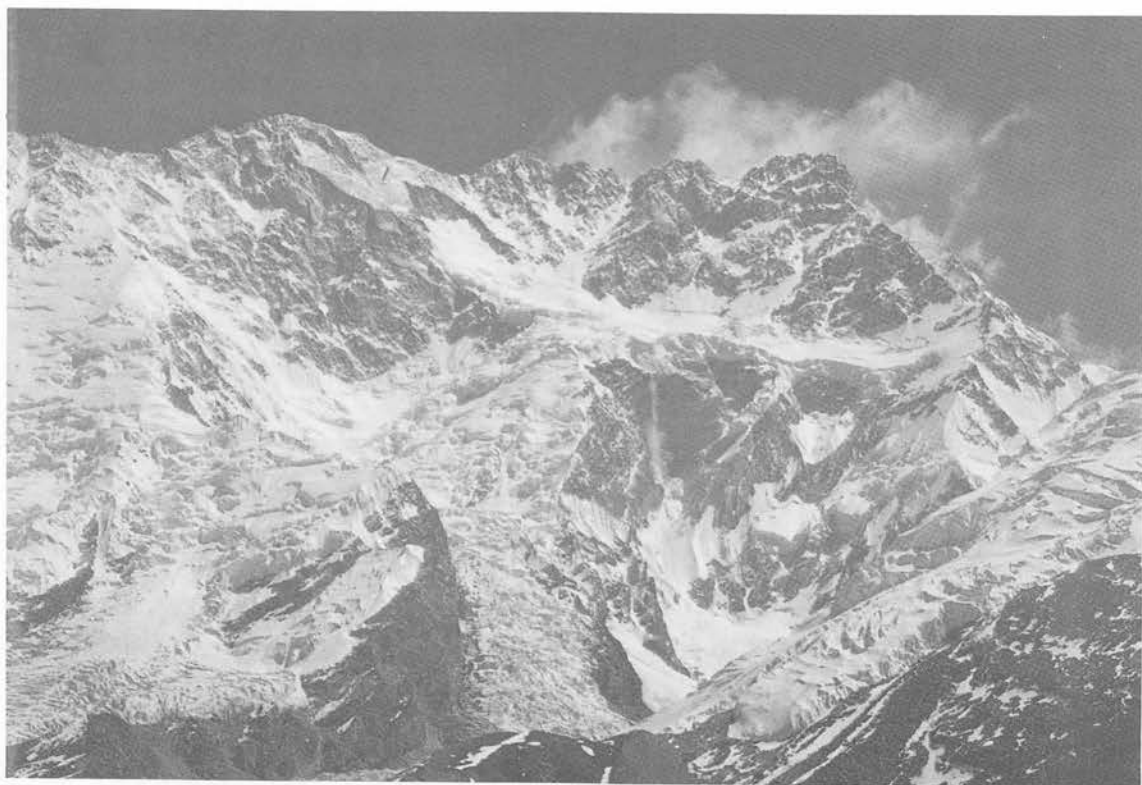
5月15日 ベースキャンプを撤収した。この夜ヤルン谷は大雪に見舞われた。ラムゼーでヘリコプターを待っていた凍傷の2名とサポート隊も、合流して19日には、最奥の部落ヤンボディンに到着した。一日ゆっくり休養をとった。そして、疲れた体にムチを打って緑の青もうせんを敷きつけたような山稜の街イラムに到着したのは26日であった。

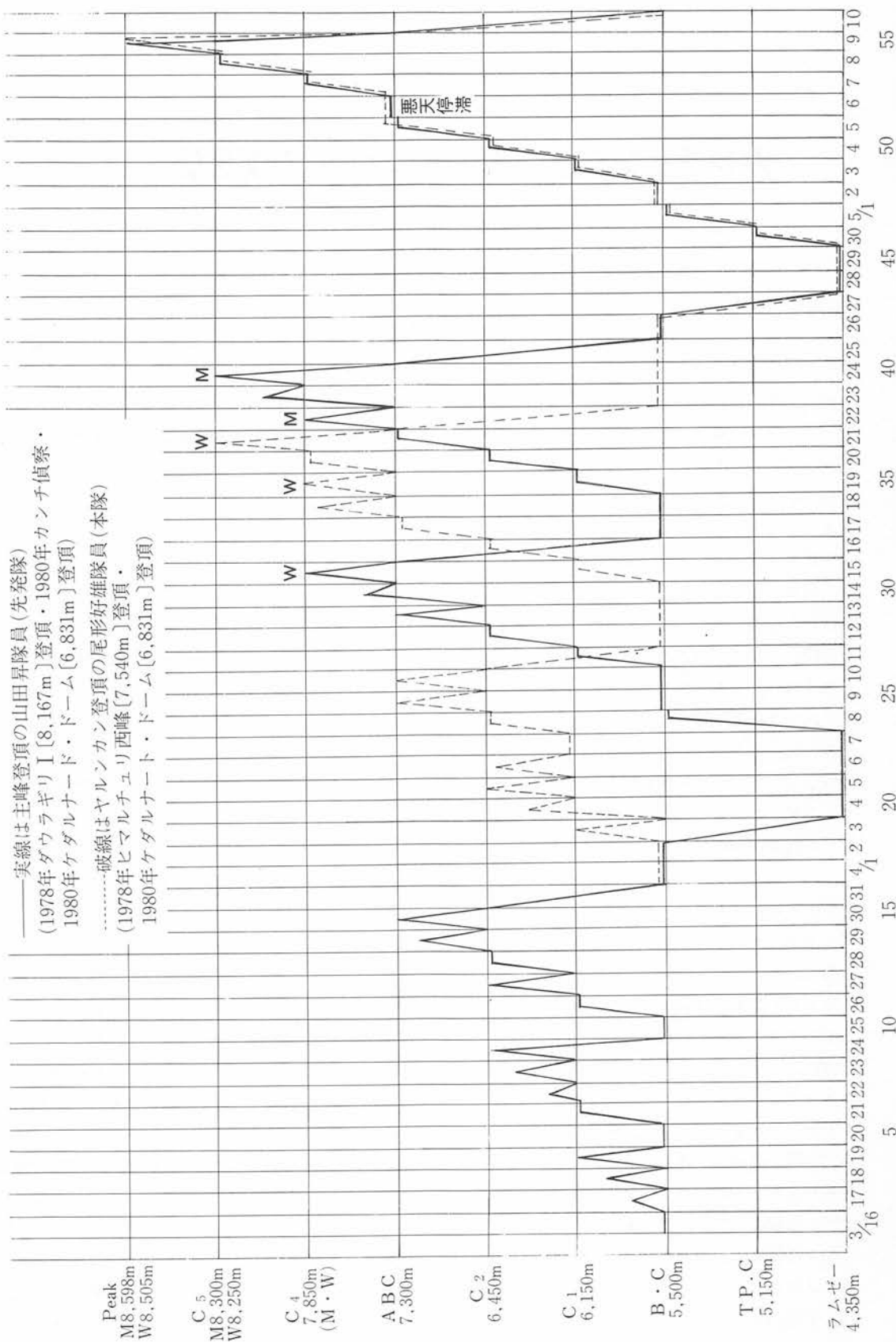
4 おわりに

今回の遠征を通じて多くの方々にお世話になった。特に多忙な中をカトマンズ～ＢＯ間を結ぶ無線の仕事のためだけに貴重な時間を割いて特別参加してくれた、加藤康二氏には、その無線の仕事面以外にも多くの教訓を得た。お陰様でネパール政府観光省との連絡もスムーズに行き、我々の少い予算の中では大きなウェイトを占めた無線機の購入も無駄ではなかったと安緒しているところである。

医療面では急拠参加が実現しそうだった方が都合で取り止めになり加藤亮子氏にこれも急拠参加していただいた。残念ながら遠征や医療ということに関して見解が大きく違い我々の期待した効果は上がらなかった。遠征における医師の果す役割は平常時と違う事を考え合わせれば非常に大きい筈であり、じっくりとした話し合いの下に同行される形をとるべきだったと反省している。

（文責・山森 欣一）





カンチェンジュンガ・トラバース敗退記

ヤルン・カン側縦走隊リーダー

尾 形 好 雄

昨日、ヤルン・カン側の方はC・5建設に手間取り、シュラフに潜ったのは10時半頃であった。キャンプ・サイトのカットニングで酷使した上腕の筋肉が痙攣し、アタック前夜と云うのにほとんどまんじりとしないうちに1時50分に起き出す。

なにもかも凍てつく冷凍庫の様なテントの中でコンロに火をつけ、暖を取りながら白湯を飲む。昨夜からお茶と行動食のみの食事である。

4時の交信で主峰側のサポート隊はすでに出発したと云う。こちらのサポート隊はさらに1時間程遅れて5時15分に出発する。我々トラバースーの方は、アタック装備を着装したまま1時間程待機してからC・5を後にする。ところが出発してみて驚いたことには、サポート隊はまだ80m程しか進んでおらず今日のアルバイトが懸念された。

酸素を毎分1ℓにしてサポート隊の後についてビスタリ、ビスタリ登っていくも時間ばかりが気に懸る。

W・C・5からはクローワール内を一条に走るラビーネンツークに登路を取る。ラビーネンツーク内はアイゼンが気持ち良く利き楽な登高であったがトップのピッチは遅々として上がらなかった。A・B・CからC・4、C5、そしてアタックとこの三日間、サポート隊の人達は連日、ラッセルのアルバイトを強いられておりその蓄積した疲労が動作を緩慢にしているのであろう。

辺りの岩稜に朝陽が当りだしてもクローワール内には陽が射し込まず、トップのラッセルを待つ間、手足がかじかんでくる。

W・C・5を出発してから3時間後(午前9時)漸く頂上直下の灰色岩壁帯の基部に到着する。もうすでに主峰側は頂上に立っているのではないかと思うとトランシーバーのスイッチを入れるのが恐しかった。

この基部からは左に走る雪面に入り、100m程登った地点から右に折れて頂上岩壁を登る。

もうこの辺りからトップを交替しようとする。遅くとも10時には頂上には思っていたものの、頂上は未だ遠く時間だけがどんどん過ぎ去るのみであった。

八嶋にトップ交替を告げ、角田と替わる。岩にへばりついた不安定な積雪層はトップの足を引っぱり登高は難渋する。

主峰の眺望を妨げていた右側の岩稜が俯瞰出来るようになってからカンチ主峰の方へ目をやると主峰隊も今が頂上に立つところであった。

ところが、この頂上迄あとわずかと云う地点に来て飛田の酸素ボンベが空になる。酸素が切れたと云われ愕然とするも良く考えてみればすでに7時間近くも経過しているのである。間もなく角田の酸素も空になり、この予想以上の登高時間にトラバースの敢行、サポート隊の下降と云うものに危機感を抱く。

角田の縦走隊用酸素ボンベを替って背負い飛田、角田にはそのまま無酸素で登って貰うことにする。

酸素の切れた地点から2ピッチ、約100m程ゲズグズに脆い岩場を登ると目の前にヤルン・カンのスノーピークが在った。(12時30分)、さらに20～30分過ぎてから八木原、飛田も到



着し、ヤルン・カン側の隊員5名はそれぞれ頂に足跡を印す。

B・Cの隊長と長い交信のやりとりの後、「トラバースは中止」との指示を受け、長い間夢みてきたカンチのトラバースは終わった。己れの力を十分に発揮する前に閉幕となってしまった無念さにとどめもなく流れ落ちる涙はどうしようもなく、只々残念でならなかった。頂上からの主稜線を挟んで対峙する主峰には主峰隊のメンバーが立っており、またしても三年前のヒマルチュリの時と同じ思いをさせられた。

何んの感激も無いまま頂上での儀式を終え下降に入る。下りは始める頃には午前中の天候も崩れ、ブリザードに見舞われる。白い悪魔の狂宴はゴーグルを曇らせ視界を妨げる。雪盲を恐れながらもゴーグルを外して下降する。

頂上直下から2ピッチ(100m)フィックス・ロープを施こして安全を期する。フィックス・ロープが無くなったところからは一步一步慎重にクローワールを下る。一直線に滑り台の様なき落ちたクローワールは、それこそ全神経を集中させての下降であった。

16時20分 W・C・5へ帰着、早速、撤収にかかる。暫らく遅れてから角田そして飛田、さらに遅れて八嶋、八木原が戻り、全員無事にクローワールを降りきる事が出来た。

角田に一足先に下って貰い、自分はテントを撤収してから膨れ上がったザックを背に下降に入る。

続いて飛田、八嶋、八木原の順で下り、澁の八木原が下降に入った時は18時をとうに過ぎていた。

C・5からはフィックス・ロープに導びかれながら1ピッチ毎慎重に下る。12ピッチほど下った所でルートのだ真中に雪崩の跡があり昨日でなかった事に感謝する。

すでに撤収されたC・4に辿り着いた頃にはすっかり陽も暮れ小雪もバラつき始めた。C・4にはサポートの佐久間と角田が待っていてくれたが、C・3迄のホワイ・アウトが懸念された為に2人にはトレール確保に先行して貰う。

すっかり撤収されてしまったC・4で一人、後続を待つもなかなか現われず、じっとしていると厳しい寒気が手足の先からしのびよってくる。

20時近くになって漸く3名が到着、かなり疲労困憊の状態であったが、休憩もほどほどにC・3に向けて腰を上げて貰う。

クローワールを降り切った安堵感とこれ迄の畜積疲労のせいか、C・4からはさらにベースが落ち闇夜のグレート・シェルフの中を長い長い下降を強いられる。

5月9日と云うトラバース敗退の無念の日が翌日になろうとする23時40分、我々は漸くC・3に帰還した。

カンチェンジュンガ主峰登頂

カンチェンジュンガ縦走隊リーダー

山田 昇

この報告は本来であれば、縦走成功の報告として書きたかった訳であるが、「8500mラインの縦走」と言う課題を残しての報告ということになってしまいました。

当初の計画で行けば、最終キャンプ(C5)から3～4時間で登頂、そして縦走というつもりであったが、登頂だけにとどまってしまったことは、我々としてもまことに残念でなりません。

5月9日、我々主峰側縦走隊2名とサポートリーダーの保坂は明るくなるのを待って最終キャンプを出発した。サポートの若手2名、片岡、鈴木茂そしてシェルバのニマ・テンバの3名が先行してラッセルをして行ったが、思わぬ雪に膝上、ところによっては腰近くまでのラッセルに阻まれ、大巾な時間の遅れとなり、縦走隊が、先行の3名に追いついた時にも、まだそれほどルートは進んではいなかった。

ふり返った我々の背には、ヤルン・カンへ続く稜線が長々と伸び、その険しさにふと不安を感じたのも確かである。けれどヤルン・カン側からの縦走がすでに始められているのではないかと気にしながら主峰の頂へと急いだ。

過去の隊、昨年の国際隊や、初登頂のイギリス隊などの記録を見ると、8300mの我々の最終キャンプ地点より頂上までは、3～4時間で登頂しており、その時間で、頂上へ立てれば、稜線が多少困難ではあっても、縦走は十分可能であろうと考えていた。

しかし3時間はまたたく間に過ぎ、その時間にはまだ主峰の頂上へ向う稜線上の、ウエスト・コ

ルまでへも大分距離を残していたのである。そして時間がかかり過ぎていると言うことが、縦走隊の我々には強いプレッシャーとしてのしかかって来た。

ラッセル者2名は、深い雪のために酸素の消費(毎分3ℓ)も激しくすでに残り少なくなっていた。そのためにこのまま行ったら、縦走はおろか、登頂までも危うい状態になるのではと危惧され、縦走隊員も一緒にラッセルは交替で行うことにした。

ウエスト・コルに達した時には、2名のサポート隊員の酸素はすでに無くなっていた。サポート隊は縦走用の酸素を2本背負っていたが、「縦走を成功させるため」と言い、それらに手をつけることはしなかった。

ウエスト・コルからはそれ程の距離も無く、昨年の山学同志会の記録などを見ても稜線の雪質などを常識的に考えれば、時間はかからないだろうと思っていた。しかしここからもやはり膝上、ところによっては腰までのラッセルを強いられることになった。そのため予定より倍近く時間がかかり気持の上では、半分くらい縦走は無理ではないか?と思い始めていた。

稜線には、ヤルン・カンからの縦走隊がすでに行動を始めているのではないかと、何度も何度もふり返り確認をした。そんな気持で見ると、露岩が人陰に見えだし「負けられぬ!」とばかり懸命にラッセルをし、頂上へぬけるルートをあえぎ、進んだ。

ルートは、頂上下の岩の直下をトラバースして



ヤルン氷河側に派生する、小尾根に登りそれをたどると頂上に着いた。すぐにベースキャンプの隊長と交信をするが、時間が11時51分と言うこと、そしてルートが長大で相当な困難が予想されること等を考え、主峰よりの縦走は断念、と言うことになった。残念なことではあったが、我々の力が足りなかったこと、このルートの難しさを読みきれなかった甘さなどが原因であろう。

この日は風もあまり無く、天気も良かったので、頂上よりの展望は最高のものであった。遠くチベットの間々、シッキム、エベレストやマカルーそしてヤルン・カンはもちろんカンチェンジュンガ南峰、中央峰、ジャヌーなど見渡すことが出来、

頂上よりのパノラマ写真も状態良く撮ることが出来た。そしてもう一つの仕事である測量用ポールを頂上直下に設置しその確認もベースキャンプの下に待機していた学術隊によりされた。色々の仕事を行い、2時間あまり頂上にとどまり下山し、この日のうちにA、B、C、(C3)まで下り、ここにとどまり頑張っていた、菊地副隊長にむかえられた。

色々と支援していただいた皆様にこのような結果を報告申し上げるのは、心苦しい限りですが、今は全員大きな事故も無く、無事帰国出来たことを、うれしく感じております。

ご協力者名簿

(あ)

アイデアル㈱
 ㈱アイ・ディー・エス
 ㈱アルプス・クリエイツ
 ㈱アルプス・ヤマゴロー
 朝日新聞社
 味の素㈱
 味の素ゼネラルフーズ㈱
 安藤昌宜

(い)

イエティ同人
 ㈱ICI石井スポーツ
 石井孝寿
 ㈱池利商店
 伊東正義
 ㈱伊藤園
 伊藤孝司

(う)

植竹清孝
 内田食品㈱
 内田嘉弘

(え)

エアー・インディア
 ㈱エイト音楽企画
 エスピー食品㈱
 エバラ食品工業㈱
 エビオス薬品工業㈱
 エビス冰糖㈱
 ㈱エムバイヤフーズ
 ㈱栄太楼総本舗
 遠藤登

(お)

大倉商事㈱
 大塚製薬㈱
 ㈱大場計器製作所
 ㈱大平工業所
 小川テント㈱
 岡村武
 桶川和気夫

(か)

㈱カネナカ食品
 ㈱カモシカスポーツ
 カモシカ同人
 カンベ家庭塗料㈱
 カンロ㈱
 外務省
 花王石けん㈱
 加賀屋
 梶本機械工業㈱
 ㈱加藤美峰園本舗
 神奈川ブリジストンガス㈱
 川重防災㈱
 関西ペイント㈱
 ㈱神田食品研究所
 関東製菓㈱

(き)

キッコー食品工業㈱
 キッコーマン㈱
 ㈱キャラバン
 北川勇人
 北瓜商店
 ㈱木村コーヒー店
 崎陽軒㈱

京都養生湯本舗

㈱玉露園

(く)

国井治
 群馬県こんにゃく原料商工業組合
 群馬県ヒマラヤ登山隊 1978年

(こ)

㈱コクゴ
 光陽製菓㈱
 越谷英雄
 寿食品工業㈱
 小西政継
 小西六写真工業㈱
 小林英見
 紺野富男

(さ)

㈱サッポロビール
 ㈱サーモ
 斉藤哲也
 斉藤肉店
 ㈱酒井甚四郎商店
 坂田技術研究所
 三信製織㈱
 三省堂
 三宝商事㈱
 山陽スコット㈱
 三洋電機㈱東京支社
 三楽オーシャン㈱
 三立製菓㈱

(し)

㈱シナノ
㈱シモグチ
シャープ㈱
S・R・シャルマ
㈱志水
昭和電線電纜㈱
設楽芳夫
㈱白子
進栄鋼鉄
信州大学医学部順心医学研究所
新進食糧工業㈱
新東京フレックス㈱
十條キンバリー

(す)

スズキ自動車工業㈱
㈱スズキ自販東京
㈱スタック大倉
水地征夫
杉本忠男
㈱鈴木酒造場
鈴木孝
鈴木正規
鈴木雄一
住金物産㈱
諏訪新雪荘

(せ)

精糖工業会
積水化学工業㈱
全国珍味商工業協同組合連合会
全国農業協同組合連合会

(た)

タイホー工業㈱
㈱タジマ屋製菓
ターダ
ダックス

㈱ダンロップ
第一化学薬品㈱
大正製薬㈱
泰東製綱㈱
大日本除虫菊㈱
平良三郎
高木産業㈱
高橋亭夫
高橋通子
滝川㈱
武田薬品工業㈱
丹部節雄

(ち)

チノン
千歳ゴム工業㈱

(つ)

月星化成㈱
土谷食品㈱
土谷正伸
堤信夫

(て)

デイック家庭機器㈱
㈱寺岡精工所

(と)

㈱トーモク
トモミツ縫工㈱
㈱東亜計機製作所
土居正勝
東京カリンントウ㈱
東京昆布海藻㈱
東京芝浦電気㈱
東京都山岳連盟
㈱東信化工
東洋水産㈱
㈱東北アヲタイヤ

㈱東北伊藤ハム
東北缶詰㈱
㈱東北ハム
東北銘醸㈱
東レ㈱
東和化工㈱
利見商事
㈱戸田屋
豊国食品工業㈱

(な)

ナトリ食品販売㈱
中岡久
中里海産㈱
長瀬産業㈱
㈱永谷園本舗
㈱中村商会
名古屋溪梭会・蒲郡山の会
合同ヒマラヤ登山隊

(に)

ニチレイスポーツ㈱
ニッカウキスキー㈱
㈱新島電機
日清製粉㈱
日清製油㈱
日東電気工業㈱
日本オリベッティ㈱
㈱日本缶詰協会
日本計量機器工業連合会
日本紅茶㈱
日本光学工業㈱
日本ゴム工業会
㈱日本山岳協会
日本食肉缶詰工業㈱
日本醤油協会
日本専売公社
日本タッパースエアー㈱
日本通運㈱

日本ボラロイド(株)
日本ポリエチレン
製品工業連合会
任天堂(株)
(株)にんべん

(ね)
ネパール王国観光省

(は)
ハウス食品工業(株)
(株)パロマ
橋本フーズ(株)
橋本龍太郎
(株)服部時計店
花咲洋

(ひ)
ヒガシマル醤油(株)
ピース金物本舗
ヒット・ユニオン(株)
東日本ハム(株)
聖酒造(株)
(有)日高食品工業所
日立熱器具(株)
日立マクセル(株)
檜山隆

(ふ)
(株)フカサワ
ブリジストン液化ガス(株)
ブリジストンサイクル(株)
(株)フリードフーズ
藤江幾太郎
富士工器(株)
不二紙工(株)
富士食糧(株)
富士写真フイルム(株)
藤森工業(株)

(株)不二屋

(へ)
ベンガル湾同盟

(ほ)
星野通明
細貝栄
(株)細木商店
北海道農業乳業(株)
ほてい缶詰(株)

(ま)
松下住設機器(株)
松下電池工業(株)
松本正城
(株)丸三玉木屋
丸菱食品(株)

(み)
ミドリ安全(株)
ミヤコスボーツ(株)
水野勉
三菱商事(株)
三菱製紙(株)
緑川恭子
宮坂醸造(株)
明星食品(株)

(め)
(株)明工社
明治製菓(株)
明治乳業(株)

(む)
(株)村岡食品工業

(も)
(株)桃屋
森永製菓(株)

文部省

(や)
ヤマカノ醸造(株)
ヤマサ醤油(株)
柳沢須佐男
矢野郁雄
山幸
山崎製パン(株)
山下マーク(株)
(株)大和酸器
大和製衡(株)
山本光学(株)

(ゆ)
雪印乳業(株)

(よ)
横井醸造工業(株)
横田正利

(わ)
若林(株)

(ら)
ランジャン・バッタチャリア

(り)
リーベルマン・ウエル
シュリー&CO, SA
リンナイ(株)
理研ビタミン(株)

(ろ)
(株)ロ ッテ
(株)ロ ッテ・アド

(わ)
若尾義男

派遣団体

隊 名 日本カンチェンジュンガ学術遠征隊
(英文) THE JAPANESE KANGCHENJUNGA
EXPEDITION

主 催 日本ヒマラヤ協会
後 援 文 部 省
財団法人山岳協会
朝 日 新 聞 社

実行組織

日本ヒマラヤ協会カンチェンジュンガ遠征実行委員会

会 長 柴 田 金之助

副会長 山倉洋一 稲田定重

実行委員長 清水 澄

実行副委員長 西郡光昭

事 務 局 長 山森欣一

事務局

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

淀橋食糧ビル 506 号

日本ヒマラヤ協会

☎ (03) 367-8521

編集後記

▶長い間夢にみていた 8,500 m の縦走は、厳しくも楽しいものであった。総じて言えばこのプロジェクトの核心は「人」であったと云っても過言ではあるまい。

▶隊員のうち 7 人がポストモンスーンに、それぞれのエクスペディションに参加することになっている。その為お世話になった多くの皆様へのご挨拶にもほんの限られたメンバーがお伺いすることになった。隊の行動を一日も早く報告する必要となり本書の発行となった。

▶願わくば本プロジェクトの「越えなければならない 8,000 m」の真の意味を理解して参画したメンバーの多くがヒマラヤで大きく羽ばたく日が来ることを期待したい。(山森)

1981 年日本カンチェンジュンガ学術遠征報告

昭和 56 年 7 月 31 日発行

発 行 人 柴 田 金之助

編 集 人 山 森 欣 一

発 行 所 日本ヒマラヤ協会

〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1

淀橋食糧ビル 506 号

☎ (03) 367-8521

郵便振替 東京 0-48954 「日本ヒマラヤ協会」
